

D-グループ(Diagnostic Group)における グループ過程の測定法の 開発、検証、および応用

黒崎 優美

I. 問 題

本研究は、D-グループ (Diagnostic Group、後述) におけるグループ過程の測定法について、その開発、信頼性の検証、応用として仮説に基づく実証的研究を行うものである。まず、本研究の理論的背景となるBion (1961) の集団理論における作動グループ、および基底的想定グループの概念について、そしてD-グループについて、整理しておきたい。

1. 作動グループ (work group)

まず、Bion理論において用いられる「グループ」とは、それに従事する人々のことではなく、特定の種類の精神的活動を表す。

作動グループの活動は「課題に向けられており、現実と関連を持っている。その方法は合理的であり、従って、いかに萌芽的な型にせよ科学的である」(Bion, 1961; p. 137)。作動グループは発達の観念を持ち、そのために必要な、経験から学ぶ能力を持つ。そしてメンバーによる、それぞれの能力に応じた協力がみられる。

2. 基底的想定グループ (basic assumption group)

基底的想定グループの活動は、強力な情緒的衝動を持ち、作動グループ活動を阻止し、回避するよう機能する。Bion (1961) によれば、それはグループの抱く、グループにとっては事実である「かの様に」感じられる

幻想である。さらに彼は治療グループの経験から、それぞれ異なる特徴を持つ3種類の基底的想定、すなわち依存基底的想定 (basic assumption of Dependency)、闘争/逃避基底的想定 (basic assumption of Fight/Flight)、およびつがい基底的想定 (basic assumption of Pairing) の存在を明らかにした。

依存基底的想定 (baD) において集団は、リーダーだけが全知全能であり、グループ自身は未熟で助けを必要とする無力な存在、故に自身では何もできない「かの様に」振る舞う。

闘争/逃避基底的想定において集団は、その存続にとって脅威であると感じられるグループ内・外の誰か、或いは何か (幻想的な敵) と闘うか、もしくはその敵から逃れるために集合している「かの様に」振る舞う。なお本論文においては便宜上、Stock & Thelen (1958)、Armelius & Armelius (1982) や Hafsi (1997) の提案を採用し、「闘争」(baF) と「逃避」(baFl) を別々に扱う。

つがい基底的想定において、集団の存続は、これから新しく生まれるもの、或いはまだ生まれていないリーダー (救世主) に対する希望的な期待を抱き続けることにかかっているため、「繁殖」という目的のために集まっている「かの様に」振る舞う。

3. D-グループ

D-グループ (Diagnostic group) とは、フランス学派 (CEFFRAP) によって用いられている短期的な精神分析指向のTグループである (Hafsi, 1990)。その他のTグループとの相違点は、D-グループでは「二次的過程」だけでなく「一次的過程」をも取り扱われる点にある。

D-グループでは、3~15日間に、90分のセッションが5~20回行われる。グループ構成は、(原則として互いに見知らぬ) 7~16人のメンバー、1人のトレーナー、および場合によってコ・トレーナー、2人の観察者が

らなる。

D-グループの目的は、集団心理学に対する、特に経験的な知識を提供することによって、心理的現象に対する参加者の鋭敏化を目指すことである。従って、参加者は伝統的な教育のように一方的に教わるのではなく、自ら集団現象を発見するよう導かれる。

D-グループのルールは、通常精神分析における主な基本的原則を、グループという条件に適合するよう多少修正したもので、「表現の自由原則」(rule of free speech)、「禁制原則」(rule of abstinence)、および「返還原則」(rule of restitution)、そして、これらすべての原則を保証し、かつ個人のプライバシーを守るための「守秘義務の原則」である (Anzieu, 1971)。これらのルールが、最初にトレーナーから参加者へ伝えられ、全員の確認が得られた上で第1セッションが開始される。

II. 第一研究

第一研究では、Bion (1961) の集団理論に基づくグループ過程、すなわち各基底的思想 (baP、baF、baD、baFl) および作動グループ (W) を測定するために、具体的な測定項目からなる測定法を開発し、信頼性の検証を行う。そのために、D-グループにおけるグループ過程を、内部・外部の両側面から測定し、それぞれについて信頼性を検証した。

1. 方法

・D-グループの実施

講義の一環としてD-グループに参加した学生64名は、男女の区別なく16名ずつに振り分けられ、4グループが構成された。セッション室には人数分の椅子が円型に並べられ、その外側に観察者用の椅子が配置された。室内の様子は、天井に設置されたビデオカメラによって記録された。参加者 (メンバー) への指示は、すべてトレーナーによって行われた。まず最

初にトレーナーから、前述したD-グループの目的と意味についての説明が行われた。

・測定法

D-グループにおけるグループ過程は、Bion (1961) の集団理論に基づき作成された測定法に従って、内部・外部の両側面から測定された。内部測定とは、セッションに同室した2人の観察者によるものであり、外部測定とは、セッション後作成された逐語記録の採点によるものである。

3. 結果

2人の測定者によって測定された各行動タイプ（基底的想定タイプ：baP、baF、baD、baFl、および作動タイプ：W）について、Pearson相関係数を求めた。内部・外部それぞれ3グループについてグループ毎に分析を行った結果、すべてのグループと行動タイプにおいて有意な相関がみられた（baP: $r = .47 \sim .94$, baF: $r = .46 \sim .92$, baD: $r = .38 \sim .92$, baFl: $r = .37 \sim .84$, W: $t = .52 \sim .88$, それぞれ $p < .05 \sim .0001$ ）。

III. 第二研究

第二研究では、第一研究において信頼性の検証された測定法を用いて、Bion (1961) が主張した、集団機能に関する理論的仮説の検証を試みる。

1. 仮説

Bionによって理論的に述べられているように、グループには常に、作動グループと、基底的想定グループとの、より具体的にいえば、一種類の支配的な基底的想定との共存がみられるであろう。

この仮説を検証するために、D-グループにおけるグループ過程の測定、分析を行った。

2. 方法

第一研究において実施されたD-グループにおけるグループ過程を、外部測定、すなわち逐語記録採点法によって測定されたデータを使用する。採点がすべて終了すると、各行動タイプ（基底的想定タイプ：baP、baF、baD、baFl、および作動タイプ：W）の比率を表すグラフを、3グループについて、セッション毎に作成した。

3. 結果

その結果、すべてのグループとセッションにおいて、仮説の通り、1種類の支配的な基底的想定と、作動グループとの共存がみられた（支配的な基底的想定の比率：25.3～75.8%、作動グループの比率：1.0～23.7%）。

IV. 考 察

本研究の結果から、まずD-グループにおけるグループ過程を内部・外部の両側面から測定するために開発された測定法は、内部・外部それぞれにおいて信頼性が検証された。そしてその方法を用いてグループ過程を測定した結果から、Bion（1961）が理論的に述べたように、グループにおいて作動グループと一種類の支配的な基底的想定とは常に共存しているという結論が引き出される。そしてこの結論から導き出される考察として、グループの発達を目指すならば、グループ活動において、作動グループ、そして基底的想定グループは常に共に在るという事実を受け入れ、可能な発達の過程を辿ることが必要であり、また現実的な考え方であるといえるだろう。